

第28回ふくおか県民文化祭2020  
「beyond2020 プログラム」 参加事業

青山旭子師  
追悼公演

# 遊びをせんとや

筑前琵琶保存会 第56回定期演奏会



令和2年10月17日(土) 13:00開場/13:30開演

大濠公園能楽堂 福岡市中央区大濠公園1-5 ☎092-715-2155  
※県の要請により閉館の場合あり

入場料：2,500円(来場者プログラム付)

チケット取扱：チケットポート 福岡PARCO店(福岡PARCO本館5階) ☎092-235-7223(10:00~20:30)

※マスク着用など会場の感染症対策の指示に従った対応にご協力をお願いいたします。

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のための変更等について

入場整理券の発行、座席指定をすることがあります。

無観客開催とする場合があります。チケット購入のお客様にはDVDまたはCDにて当日の様様をお届けいたします。

主催：筑前琵琶保存会

後援：福岡県・福岡市・福岡市教育委員会・(公財)福岡市文化芸術振興財団・福岡文化連盟

お問い合わせ：☎070-5691-6950(筑前琵琶保存会・寺田)

ホームページ <http://chikuzenbiwahozonkai.mystrikingly.com/>



beyond  
2020

第一部

一 海の風景

作曲 青山旭子  
演奏 筑前琵琶保存会会員

2001年「青山旭子芸歴30周年記念演奏会」の折に初演された歌詞を伴わない器楽曲としての作品。青山師が生まれ育った糸島・二丈町の浜辺で、小さな貝や生き物たちが寄せ打つ波に遊ぶ情景から曲は始まる。「幼いころ、祖母に抱かれて暖かい布団にくるまりながら波の音を聴いて眠りについてた。その時の思い出とふるさとの海をイメージした」と、在りし日の青山師は作曲の背景を語っている。

二 養老の滝

作詞 作曲 嶺旭蝶  
演奏 鶴陽満里

美濃の国の親孝行息子の話。懸命に働く吾一であったが、暮らしは貧しく年老いた父に好きな酒を買って吞ませたいという願いも叶えることもできずにいた。或る日、足を滑らせて転げ落ちた谷で滝の水を口にすると不思議なことに酒であった。

三 食わず女房

詞 昔ばなしより 作曲 山中和子  
演奏 山中和子

欲張りが過ぎる余り、ふと漏らしたつぶやきでもとても怖い目にあつた男の話。飯を食わない女房は鬼婆だった。端午の節句の由来も語られている。昔話は難題を乗り越えたり、身勝手な事をしてはならない等、生きて行く術を子供に与える。原典が九州地方の言葉ではない為、少し変えている。

四 千曲川旅情のうた

島崎藤村「落梅集」より 作曲 青山旭子  
演奏 浜本青宇

「昨日またかくてありけり……」で始まる藤村の有名な詩。故青山旭子師が宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に次いで、「詩」に挑戦した曲である。詩と琵琶の音が調和して、千曲川の流れに託した詩人の想いを伝えている。

五 純情無法松

原作 岩下俊作 作詞 佐々木滋寛 作曲 嶺旭蝶  
演奏 江田結南・宝満蝶翼

小倉の人力車夫、富島松五郎は、粗野で喧嘩っ早いので「無法松」と呼ばれていた。松五郎は出入りを許されていた吉岡家の未亡人良子のことを密かに慕っていた。夏祭りの夜、彼は叶わぬ恋心を打ち消そうと、力を込めて祇園太鼓を打ち続ける。二丁の筑前琵琶で表現する祇園太鼓が聴きどころである。

六 女殺油地獄

編詞 木村嶺魔 作曲 青山旭子  
演奏 木村嶺魔

近松門左衛門が享保6年(1721年)に書いた人形浄瑠璃の作品であり、大坂の天満で実際に起こった殺人事件を劇化したものだと言われている。主人公は、油屋の放蕩息子・与兵衛。複雑な家庭環境から親兄弟に反発し、ぐれて道を踏み外してしまった男の行きつく先は、金目当ての衝動的な強盗殺人であった。

第二部

七 遊び戯れ今様の道

作詞 柳弥生 作曲 尾方蝶嘉  
演奏 柳弥生

声技の悲しきことは、我が身崩れぬる後、留まる事無きなり  
後白河法皇の梁塵秘抄のことばに、故青山旭子先生のことばが偲ばれます。先生が大事にされていたのは、新しいものを作ること、聴き手に楽しんでいただくこと、時には笑いも……  
「今度の新曲、よかでしょうが？」

八 黒田武士

作詞 平田汲月「藤巴」より抜粋 作曲 嶺旭蝶  
演奏 高倉青香

黒田二十五騎の一人母里太兵衛友信は、使者として向かった福島正則の屋敷にて酒を呑むように強いられる。「褒美は望みのものを何でも与える」の約束のもと大杯の酒を受け、見事に呑み干し、名槍「日本号」を持ち帰る。福岡県民謡「黒田節」で有名なエピソードである。

九 風林火山

作詞 辻有水 作曲 嶺旭蝶  
演奏 柳嶺鳳

群雄割拠の1500年代、日本。甲斐国の武田信玄と越後国の上杉謙信との北信濃の覇権をめぐる数次の戦は「川中島の戦い」と呼ばれる。両軍の多様な人物の魅力ある相関、戦術の巧みさ、わけても信玄と謙信・この両雄の人物像の対比などにより、戦国の合戦史の中でもひとときわ際立つ物語として、今なおその力強い魅力は尽きることがない。

十 桶狭間の戦い

作詞 作曲 寺田蝶美  
演奏 寺田蝶美

大軍を率いて駿河より今川義元が尾張へ攻め込んできた。数で敵わない織田軍は苦戦必至とみられていた中、信長はわずかな兵を連れ出陣する。折しも桶狭間は雨模様となり油断していた今川軍の本陣に奇襲をかけた織田軍は義元を討ち取り勝利する。

十一 静

作詞 矢野信保 作曲 尾方蝶嘉  
演奏 尾方蝶嘉

時は文治。兄・源頼朝に追われる身となった義経は、最愛の白拍子・静を伴い落ち行くも大和国吉野山中にて別れる。捕らえられ鎌倉の頼朝のもとに送られた静は、命により鶴ヶ岡八幡社前にて頼朝はじめ敵の居並ぶ中、舞うこととなる。「誠にこれ社壇の壮観、梁塵ほとんど動くべし、上下みな興感を催す」と絶賛されるも、もはや還らぬであろう人を想い、謳い舞う静のその姿は、美しくも落涙にたえない。  
〜ファイナーレ〜

十二 令和春風桜暦

「元禄花見踊り」「弥栄博多」

演奏 筑前琵琶保存会会員・福岡教育大学学生  
未曾有の社会情勢となった令和二年の春、開催が叶わなかった「桜まつり」や「博多どんたく」に思いを馳せ、事態の収束を祈り演奏する。「弥栄博多」は博多どんたくの折に筑前琵琶保存会どんたく隊が福博の繁栄を願いながら演奏している楽曲である。

琵琶の音色に祈りを込めて——令和元年11月筑前琵琶保存会第二代会主青山旭子師が急逝いたしました。

司会 田中恵理 舞台進行 合同会社ベリプロクス